

銭明（中国哲学史）

陽明学の成立と展開

本論文は、中国明朝中期の思想家である王陽明（名は守仁、1472～1528）の哲学思想の成立とその学派の思想的展開について解明したものである。本論文は序論と上下両篇の本論及び結論、並びに附録から成る。

上篇は陽明学の成立を取り上げ、4章から成る。王陽明の家系と後裔、王陽明の早期思想の形成、王陽明の中後期思想の変遷、王陽明と湛甘泉の思想の異同などについて論じている。下篇は陽明学の展開を取り上げ、4章から成る。陽明学派の分化の思想的根源、陽明学各派の展開及びその異同、王龍溪と王心斎の思想の異同、陽明学派の主意説の形成と終結などについて論じている。末尾に附録として「王陽明全集未刊散逸詩文集編」を付す。

本論文の特色は以下の点にあると言える。

第1には、本論文は王陽明思想の形成過程とその変遷について、明代中末期の膨大な量の文集類や地志などの資料を博捜しつつ、細かい内容分析によって掘り下げたもので、従来にない実証的研究と言える。

第2には、王陽明の思想形成に関して、本人の性格形成や家系の問題などを具体的資料により分析することによって、従来にない視点からの解明が行われた点があげられる。

第3には、陽明後学の思想的分化の淵源を陽明思想そのものが持つ両面性、流行と収斂、自然と主宰、事上の工夫と心上の工夫、などの諸点から分析と解明を行った点である。

第4には、従来の研究で様々に論じられてきた陽明学派の展開とその思想的異同について検討と批判を行った上で、新たに虚無派・日用派・主静派・主敬派・主事派という5派に分ける見方を提示した点が指摘できる。

第5には、陽明学派の展開をとらえる際に「主意」の考え方に注目し、その主意説の形成と展開を精密に辿ることによって、明代思想史上における陽明学の思想的意義を明らかにした点である。

第6には、『王文成公全書』、『王陽明全集』に未収録の王陽明関係詩文を調査発掘し、附録としてまとめた点で、今後の陽明学研究に裨益するところ極めて大であると言える。

陽明学研究は、戦後の日本において急激に研究が進展した分野である。特に九州大学の楠本正継、岡田武彦、荒木見悟といった研究者によって、宋明儒学史上の思想的位置付け、学派の展開事情の解明、思想構造の詳細な分析などが精力的になされた。一方、1960～1970年代の中国においては、主観唯心論として否定的な評価が大勢であったが、1980年代以降は、陽明学に対する再評価と共に、その多面的研究がなされてきた。本論文は、長年にわたる日本の研究者との学術的交流を持つ銭明氏が、中国と日本の陽明学研究の蓄積を踏まえつつ、陽明学関係の文集や地志などの歴史文献を渉獵した上で、さらに王陽明の出身地である浙江省在住という地の利を活かして、王陽明全集未収録資料の発掘調査を丹念に積み重ね、その研究成果をまとめたものであり、日中学術交流の実質的成果という意味からも高く評価できる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。